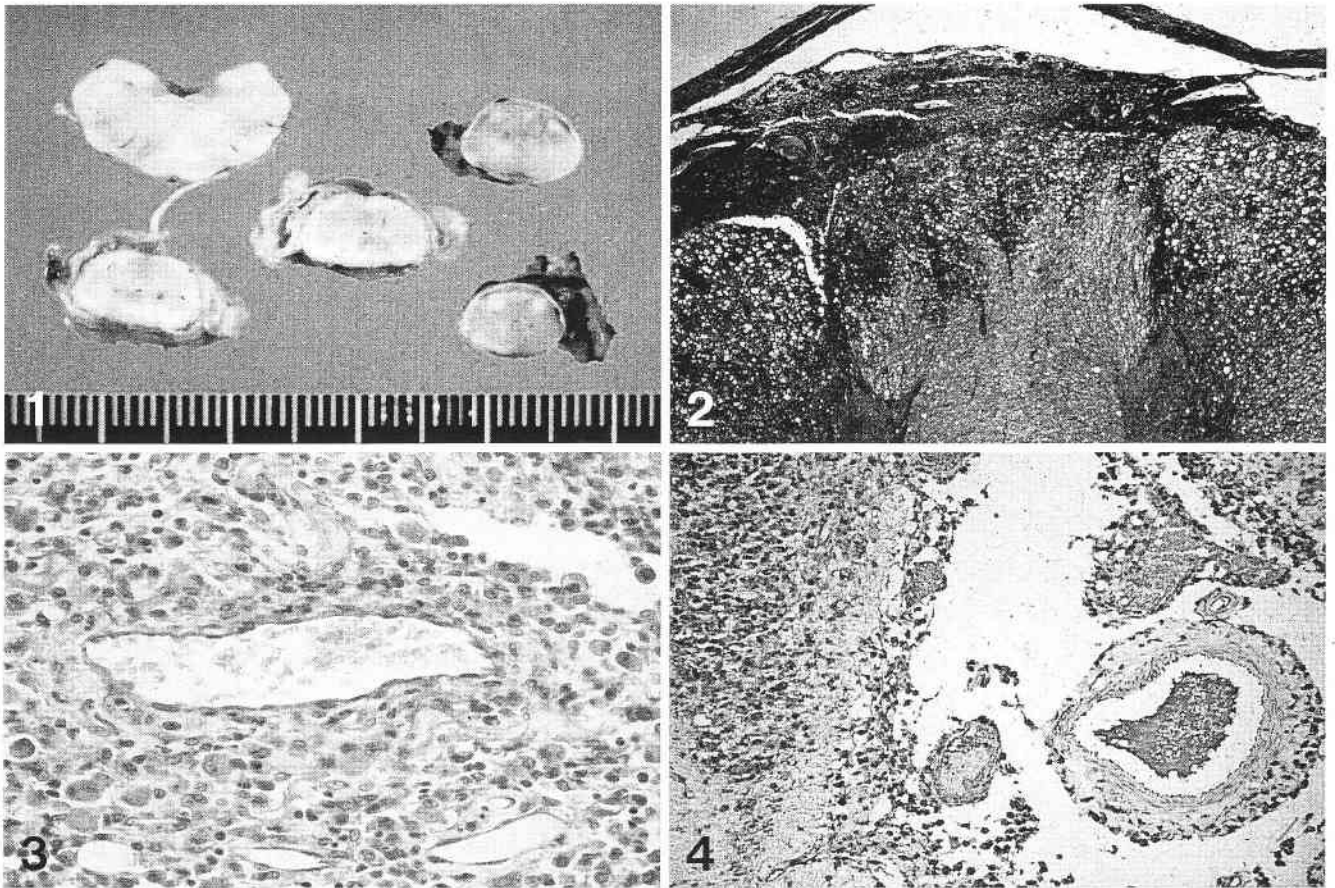


## イヌの脊髄

宮崎大学家畜病理学教室出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 799



動物：イヌ，チベタンテリア，雄，8歳。

臨床事項：1998年8月5日に後肢の不完全麻痺を主訴に開業獣医病院に来院。CSF検査の結果，髄膜脳炎が疑われ，抗生物質とステロイド剤による治療が施された。20日後の再来院時には前後肢の完全麻痺と運動失調を示した。同年10月8日死亡直前には，チック様症状や癲癇様発作が認められた。剖検は開業獣医師により行われ，10%ホルマリン固定済みの脳，脊髄，肺，肝，腎，小腸，膵臓及び血清・CSFが送付された。

肉眼所見：固定組織の肉眼観察では，脊髄髄膜の軽度肥厚と白質の瀰漫性変性が認められた（写真1）。

組織学的所見：脳脊髄髄膜の広範囲において，単核細胞の浸潤・増殖が認められたが，脊髄（C1）で顕著だった。提出標本の脊髄では，くも膜腔を置換する様に単核細胞が浸潤増殖し（写真2），しばしば血管周囲に集簇する傾向が見られた。浸潤増殖する細胞は，単球・組織球様形態を示し，大小不整形～類円形，豊富な細胞質と円形の核をもち，多核巨細胞形成もみられた（写真3）。同細胞は脊髄神経根や脊

髄白質に強い浸潤・増殖を示し，同部では脂質貪食により脂肪顆粒細胞様の形態を示していた。核分裂像も散在性に認められた。免疫染色やレクチン染色により浸潤増殖する単核細胞は，抗 lysozyme 抗体，レクチン RCA-1 に陽性を示し（写真4），また抗 PCNA 抗体には殆どの細胞核が陽性を示した。なお各種特殊染色により病原体は検出されず，検索範囲では，脳・脊髄以外の内臓諸臓器に単球・組織球系細胞の増殖は認められなかった。以上の結果より，本症例の脳脊髄でみられた病変は，組織球の非炎症性増殖に基づく変化と解釈され，イヌの肉芽腫性髄膜脳炎（GME）とは病変分布の相違により鑑別した。

診断及び考察：以上の所見より本例を，イヌの脳脊髄にみられた瀰漫性髄膜組織球症（Diffuse leptomeningeal histiocytosis in the brain and spinal cord of a dog）と診断した。イヌの悪性組織球症（Malignant histiocytosis）では脳脊髄に病変が波及することも知られているが，脳脊髄に局限した病態は稀と思われた。